

「陶彩画」という生業

「なるほど。陶彩画への取り組みは、この旅の必然だったんですね。」と納得していると、「いや、そこに辿り着く道も長かつたんです。全てはご縁が導いてくれたと思っています。」と意外な答えが返ってきた。

世界に出て日本を知り、自身の「承継する」という人生テーマを得た草場さんは、そのテーマを実現できる場所、自分の絵の原点で父親の実家である武雄市に住むことを決めた。大好きな絵を活かす道を、陶芸の世界に求めて、自身が表現したスケッチブックを持って、窯元さんへ面接して回った日々。

そんな中で、陶磁器作家の葉山有樹（はやまゆうき）さんとの出会いがあった。「良いものを作れば周りは放っておかない。うちで手伝いをしながら、研究しなさい。」と温かい言葉を受け、葉山さんの元であらゆることを吸収しながら、今陶彩画と言われている表現の実現に向けて、長い手探りの研究が始まった。

出口が見えない中、葉山さんが量産や流行という風潮に流されること無く、自らの作品を着実に仕上げていく背中が「大きな勇気になった。」と草場さんは笑う。

葉山さんとの仕事の合間を利用して、研究に没頭していたある日、「君の目指す道はまだ誰も歩いていない。独立し、君の世界を確立してはどうか。」と、葉山さんに背中を押されて草場さんは工房を立ち上げた。そこから経験した、光の見えない日々が草場さんの糧となっていた。

色が出ない、作品にならないと苦悩する日々。その努力と苦悩の日々が、自分でも気付かないうちに、光の射す方向へ導いてくれていたようだ。

2001年、プロ野球のイチロー選手がシアトル・マリナーズに移籍した時、草場さんの作品を精神の糧として持つていかれたことがきっかけとなり、追い風が吹いた。暗闇に火が灯ったように、草場さんの作品は「陶彩画」として評価されるようになり、更に絵本、映画と、見る人を離さない魅力が伝わり始めたのだ。

7月に装い新たに出発した草場さんの拠点、陶彩画美術館へ取材に訪れると、草場さんが育てた力強い作品が静寂の中で大きな存在感を放っていた。これは焼き物なのだろうか、思わず口に出すのが正しい感情だろう。草場さんの陶彩画は、陶板に鮮やかな色彩を載せて、絵画と焼き物との技術が結集した芸術だ。幾重にも重なった研究と苦悩の日々を超えて、表現の極地に立って描いたような訴えかける作品は、この美術館で生きているのだ。